

# 中国語の受動態

エヌ・ヴェ・ソーンツェワ著

川上久寿訳

## 目次

はしがき

「主語—被—(補語)—述語」公式による動詞文での「被」

動詞の述語

動作の主体を意味する名詞

動作の客体を意味する名詞

主語のために客体の意味を確実にするはたらきをする「被」とその動詞との結合

「被」を前置詞とみなしうるか

「被」を動詞のプレクティブとみなしうるか

「被」を分析的形態の成分とみなしうるか

「被」を黏着のアフィクスとみなしうるか

非限定主語をともなう文における「被」

主題文における「被」

むすび

はしがき

## I

中国語の語法的方法の体系で重要なのは、語序と虚詞（あるいは補助詞 *служебное слово* 英語の *form-word*——訳者）である。この虚詞により文中のある一定の単語の役割がはっきりとするし、単語間の語法的むすびつきが決定される。しかし語序のはたらきが基本的に上述の分野にかぎられるとすれば、虚詞の使用範囲はたいへん広い。中国語法（また西欧）の伝統による

「虚詞」の概念には、多くの言語学者（基本的にはソビエトの）が附加成分（аффикс, affix）としているものも含めて、あらゆる補助的要素が入る。もしも「虚詞」という術語を広い（これまでの）意味にとるならば、中国語の虚詞のうちいくつかは実詞のカテゴリー的意味の上に積み上げられた補充的附随的な語法的意味となることを認めねばならない。

虚詞のこの本質は中国の言語学者の注意をますます引きつけており、<sup>(1)</sup> それらを区分して、とりわけ虚詞のうちから特殊なモルフェームとしてアフィクスをとりだそうとしている。<sup>(2)</sup>

実詞の附随的な語法的意味をつたえるアフィクスやそのような虚詞を選別することにより、中国語の形態構成の形態論を語るができるようになる。中国学の文献では形態論の宣言的認定から形態的要素のより深い研究、したがってまた中国語の形態論全体への移行がみとめられる。

虚詞の形態論については多く書かれているが、<sup>(3)</sup> これを若干の中国の言語学者は分析形態論として論じている。<sup>(4)</sup>

本論の研究対象は中国語の虚詞のひとつで、被動態に用いられる「被」である。

そのプリズムをとおして研究するのは、中国語の形態論の諸問題、形態要素の本性と特徴の問題、それに中国語の語法範疇の問題である。

「被」のはたらきを明らかにすることはこれらの問題の研究と直接むすびついている。言語システムにおける「被」の本性とその位置につき、ある程度行なわれている議論が事実上はもう中国語の形態論の特徴にかんする一般的議論になった。

「被」はシンタックスにも形態要素にも関係をもつ。シノロジーではこれが至極多様に、つまり、プレフィクス、前置詞、助動詞として解釈されてい

(1) 語法論集、第一集、北京、中華書局出版、1957。

(2) 呂叔湘、孫德宣、助詞説略、中国語文、1956、No. 6、33-39頁。

(3) 張壽康、略論漢語構詞法、中国語文、1957、No. 6、1-8頁。

(4) 高名凱、語法範疇、語法論集、第二集、北京、中華書局出版、1957、65頁。

る。種々の相異った観点があるということは、この虚詞の用い方を決定する理由もその言語機能の条件もこれまで明らかでなかったからである。

一般言語学から引いたアフィクス、単語の形態、それに語法範疇にかんする普通概念は、中国語にはあまり適用されず、また往々にしてまったく適用されない。これは「被」の本質の問題と、それから発生する問題の解決をむずかしくする。

虚詞「被」はシンタックスの要素であるという考えが、いちばん広く行なわれている。こういう解釈のしかたはいろいろと説明され根拠づけられている。しばしば「被」は動作の主体の附加成分 (показатель—以下ロシア語を略す—訳者) とよばれ、また被動 (受身) の意味がその文にふくまれているとみなされている。

形態論的立場にある人は「被」を動詞の受動の意味をあらわす方法としている。

このような「被」の解釈にたいする反論は一般理論の考察の線で行なわれ、次の点を根拠にしている。1) 「被」が動詞から分化したこと (シンタックス的分離)。2) 単語のみならず単語の結合に形態をあたえること。3) 「被」を任意に使用しうること。

「被」が形態化されないことは滅多にない。したがって、それがあらゆる動詞 (他動詞, 自動詞) と共に用いられるということを理由に態 (залег, voice) をあらわせる。これらのことや任意な使用により、中国語には能動態, 受動態がないともいわれる。したがってまた、概していえば態や態をあらわす附加成分がないともいわれることになる。本稿で研究するのは「被」のはたらしの条件であり、「被」が形態要素に関連することが問題として提起されよう。

## II

「被」を構成中にふくむ文では受身の意味は具備されているようにみえる。したがって語法的見地からその意味が何か、そしてどんな方法でそれが

あらわされるか、を明らかにするのが任務となる。

文が受身であることは、動作の現実の主体と客体をあらわす単語間に一定の関係があることで判断されるのがふつうである。

とくにロシア語では「動作の現実の客体（単語，その意味するもの。筆者）が主格の形で文の主語となり，そして現実の動作の主動者（単語，その意味するもの。——筆者）が前置詞のない造格の形で補語（дополнение. 英語の object. 以下同じ——訳者）となるとき，言いかえると，主語となる人あるいは物が動作をおこさずこの動作の附加語となってある動作をうけるととき，語法的意義での受動の意味では，動作の主動者と動作の客体（動作の主動者と動作の客体を意味する単語間のこのような語法関係——筆者）との間にこのような関係<sup>(5)</sup>がわかる。」

もしも動詞の一定の形態が一定の主体・客体的関係に一致すれば，それは態関係である。「態の範疇は動詞の形態にあらわされている動作の主体（主動者）と客体（主体と客体を意味する単語間といったほうがよいかもしれない——筆者）間の関係<sup>(6)</sup>を意味する。」

主体・客体関係を変えると態も変る。同じ現実の主体・客体関係を語法的に変えて表現すると，能動態・受動態と異った語法的意味になる。

ロシア語では態の意味を表わすのに二つの方法がある。第一は主体と客体を意味する単語を用い，文の一定の成分のはたらきによる。第二は特殊な動詞の形である。たとえば，受動態は客体をあらわす単語が主語に用いられて表わされ，また特殊な動詞の形によって（助詞「-ся」あるいは形動詞の形）であらわす。このばあい次の従属関係がある。つまり，主語となる客体をあらわす単語を用いられるのは，一定の動詞の形によってだけである。

たとえば «Рабочие строят дом» と «Дом строится рабочими»。

これらの文では動詞が各種の態形式に用いられており，同一の現実の主

(5) «Грамматика Русского языка», Т. I. М., 1953. стр. 416.

(6) 同上, 412頁。

体・客体関係がちがって表わされている。第一例では《дом》という単語が動作の客体となり、補語のはたらきをしており、第二例では《дом》という単語が客体でありながら主語になっている。動作の主体の《рабочий》という単語もまたそのはたらきが異り、第一例では主語、第二例では補語である。

ロシア語では名詞の機能変化は、その格形式の変化によるのがふつうである。

上例の《дом》という単語のはたらきは、それぞれ異っている。しかし表面は単語の形態上あらわれていない（無生物の男性名詞の対格と主格の語尾は一致する）。

第二例の《дом》が主語としてのはたらきをしているのは、動詞の形態、より正しくいえば助詞の《-ся》によってである。

助詞《-ся》（動詞の受動態の形態である）は、第二例では動作の客体が主語であり、また主語と述語間の関係が動作の客体と動作との関係であることをしめしている。

受動態の動詞の形態がこういうはたらきをすることは、動作の主体をあらわす単語のない二項の文ではもっとはっきりする（三項の受動態文における動作の主体は造格であり、主語が何かほかの単語であることを間接に証明している）。たとえば、

《Мальчик побил》と《Мальчик побит》。

第一例の能動態形式の文では主語となるものが動作の主体となっている。第二例の受動態形式の文では主語になるものが動作の客体である。《Мальчик》という単語は態が異なるにつれ、主語でありながら動作の主体になったり客体になったりする。とくに大事なことはこれが動詞（態）の形にかんしてだけ著しいことである。言いかえると、態の形をかえることにより主語の内容が変化する。

同じ現実の主体・客体関係をちがってあらわしている三項の中国語の文をみてみよう。

他那庄重的嘴唇封住了許多話

許多話却被他那庄重的嘴唇封住了（林海，318）

第一の能動態の文では「許多話」という単語の結合が客体でありながら補語となっている。第二の受動態ではそれが主語である。

「嘴唇」は動作の主体をあらわす単語であるが、またはたらきが変わっている。第一の文では主語であり、第二の文では補語である。

ロシア語では文の顛倒は名詞の形態と動詞の形態によってつよめられるのがふつうである。単語のシンタックスとしてのはたらきを表わすための語序は語法的にはたらきをしない。（«Рабочие строят дом»——«Дом строят рабочие», «Рабочими строится дом»——«Дом строится рабочими»）

中国語の名詞には格がないから、能動態から受動態にかえるにはシンタックス関係をあらわすために、ほかの方法をとらねばならない。受動態における名詞の他のシンタックスのはたらきをする成分となれるのが、新しい語序である。能動態で動作の客体となる単語が動詞の後におかれるとすれば、受動態ではそれが文のはじめにある。

もしも、中国語の固定した語序をみとめることから出発するならば、また補語をもつ他動詞を述語とする文の主語はつねに文のはじめにあり、補語は文のおわりにあると考え、文中の単語の位置をかえれば、いつでもそのはたらきが変わるということから出発すれば、第二の文の動作の客体を主語とみる根拠がでてくる。

もし第二の（受動態）文の「被」のはたらきをはなれると、二項の文における単語の新しい位置は単語のはたらきの変化（補語になっている単語は主語となる）、また主語の内容の変化（前には補語だった客体の意味をもつ単語は主語になる）を説明できるかもしれない。

しかし、もしもこの立場から二項の受動態文を相応する能動態文と比較してみると、能動態から受動態にかえるとき（また反対のばあいも）単語の置換えはおおむね行なわれない。主語の内容は単語の位置が変わることによ

って変るものではなく、「被」があるかないかによる。たとえば、

他拒絶登陸

他被拒絶登陸

第一例では主語の「他」と述語の「拒絶」の間に動作の主体と客体との関係がある。

第二例の受動態では主語の「他」と述語の「拒絶」との関係は客体と動作との関係である。

代名詞「他」はどちらの文でも主語であり、文を倒置しても位置は変わらない。

ふたつの文で述語のグループは同じだが、主語の内容はちがう。「被」のある文では主語が動作の客体の意味となる。このことから明らかにいえるのは、二項の文に「被」があるため主語の内容が変わり、文全体が受動態になることである。

「被」は動作を伴う動作の主体として「他」と「拒絶」という単語の相互関係をしりぞけ、動作を伴う動作の客体として、この二つの単語の相互関係を定める。

「被」のこういう文中での語法的はたらきは、「名詞は動語とむすびついて動作の主体たる主動者(производитель)たることをやめる<sup>(7)</sup>」受動態の附加成分(формант, formant)の語法的はたらきと同じであることがわかる。

したがって二項の文の主語の内容の変化は、単語の位置の変化とは関係がない。ただ「被」を用いることによってのみ能動態を受動態にかえることができる。

三項の文における「被」のはたらきはどうか。

以上に述べたように文中の単語の位置をかえると、そのはたらきも変るといことは、現在では大部分の研究者のみとめているところである。その

(7) 同上。

他文のはじめに主語だけでなく補語もおけるとみなしているものもいる。はたらきをかえずに文の成分をおきかえられるということから出発して、次の二つの構文を比較しよう。

同時後半句他又突然鎖住了（林海，318）

許多話却被他那庄重的嘴唇封住了（林海，318）

もしも第二の文にある「被」をとると、現にある成分と単語の位置からみて、これらの文は一致する。この二つは「客体の名詞——主体の名詞——動作の動詞」の公式になる。いずれの文でもはじめの名詞は非活動体で、第二の名詞は活動体であり、動詞は同じ型の造語様式により構成される。

第二の文に「被」のあることを考えに入れながら、二つの文を比較してみると、これらの文の構造はちがうようにみえる。第一の文では客体の名詞は補語で（前に出されておき）、第二の文では客体の名詞は主語である。客体の名詞の各種なシンタクスのはたらきは、その位置では説明できない（それらの位置は同じである）。文の間のただひとつの違いは（客体が主語になっている）第二の文に「被」があることである。これによりはっきりと結論を出せることは、第二の文における客体の名詞の他のはたらきは「被」のあることできまる。第二の文から「被」をとりさって、この結論をしらべることができよう。この文に「被」がないと受動態でなくなり、文中での名詞のはたらきは変り、シンタクス上は第一のものと同じになる。

こうして三項の文では（二項の文でも）「被」が動作の客体と動作の関係として主語と述語間の一定の相互関係を、また動作の主体動作との関係として補語と述語間の一定の相互関係を決定する。「被」は三項の文で動作の主体となる単語の前におかれる。したがって「被」はしばしば動作をするものの附加成分（показатель）<sup>(8)</sup>といわれる。

(8) ベ・イサエンコ、エヌ・カロートコフ、イ・サヴェートフ・チェン、中国語教科書、エヌ・エヌ・カロートコフ編、5分冊（ガラス印刷法）、1951、380頁；呂叔湘、朱德熙、語法修辭講話、北京、开明書店、1952年、18頁。



シンタックスのはたらきからいうと、「被」はロシア語の助詞 «-ся» を  
思わせる。動詞の述語に «-ся» があるばあい、主語には客体が補語には主体  
がなる。

ところで「被」は «-ся» のように「動作の実際上の客体が文の主語とな  
り、動作の実際上の主動者が補語となるばあい、動作の主動者と動作の客体  
との間のこのような関係<sup>(9)</sup>」のもとにある動詞に受動の意味をあたえるだろ  
うか。「被」は «-ся» と同じように動詞の形態であり、中国語には受動態のカ  
テゴリーがあるといえるだろうか。「被」のはたらきはシンタックスの領域  
にのみかぎられず、受動態の単語間の関係を操作する虚詞たるにとどまらな  
い。こうみなすべきではないのか。「被」は文中のあらゆる単語つまり動詞  
とも主体や客体となる名詞とも同じようにむすびついているとみなすべきで  
はないのか。

「被」は何よりも動詞とむすびつくというのが事実である。第一に「被」  
が文に用いられるためには動詞のあることが唯一のそれと同時に十分な条件  
である。動作の主体や客体をしめす名詞はなくともよい。第二に「被」は多  
く動詞の述語について用いられるとはいっても、あらゆるはたらきをする動  
詞（定語、主語、あるいは他の動詞の補語）に用いられるのが標準になって  
いる。したがって「被」は何か特定のシンタックス構造とむすんで用いられ  
るのではない。それがあらゆるばあいに用いられる唯一の条件は動詞のある  
ことである。「被」が動詞とはっきりむすびついていることは、このむすび  
つきの性質にかんする問題の設定のために十分な根拠となっている。実詞た  
る動詞との関係上この虚詞の全面的な考察が必要である。

「被」は各種の型の文にあらわれる、非限定の主語をもつ文、主題文  
(тематическое предложение) また主として「主語—被—補語—述語」ある  
いは「主語—被—述語」の公式からなるふつうの文にあらわれる。

(9) «Грамматика Русского языка», Т. I. стр. 416.

## 「主語—被—(補語)—述語」の型の動詞文における「被」

受動態の文の最少限の成分として「被」の外に主語と述語がある。こういう文を二項の文という。三項の文ではもうひとつの成分として補語があり、「被」と述語の間におかれる。

例

「主語—被—述語」(二項の文)

可是没等開口，我也被包圍了(林海，339)

「主語—被—補語—述語」(三項の文)

她又看見自己被許多人拉扯着(虹，44)

この二つの公式から中国語における相異なった二つの「被」が問題とされる。<sup>(10)</sup>

しかし(上述のように)二項の文でも三項の文でも「被」の用途は同じである。つまり、「被」はいずれのばあいでも補語のあるなしとは関係なく、能動態を受動態にかえる主な方法となる。この観点から「被」は補語に対する関係では中性である。このことを根拠にして、受動態文(二項または三項)の数量的構造をはなれ、受動態に必須の要求たる「被」と、またそれらの相互関係につながる動詞の考察を再びはじめることにする。

## 動詞の述語

## 「被」を動詞とともに用いる条件

多くの研究家のみとめるとおり、「被」が受動態に用いられるには一定の条件がある。

たとえば多くの学者とくに中国の学者は動詞に語尾形態のあることが、「被」が動詞とともににはたらく条件のひとつとみている。それとともに次のような条件もみとめている。

(10) 黎錦熙，新著国語文法，上海，商務印書館，1954，44頁。

- 1) 動詞の後に前置詞・後置詞構造あるいは動作が数量性をもち、そして「得」でみちびかれた構造があること。
- 2) 動詞の前に副詞があること。
- 3) 動詞に特殊な造語構造のあること。
- 4) 一回体をあらわす「プレフィックスの一」のあること。<sup>(11)</sup>

「被」を用いる条件となるこれらの要素は、動詞にたいしておかれる地位と動詞への「結合」の程度という二つの特徴によって系統的に整理できる。中国の学者はこれらの要素を、その位置からみて前置成分と後置成分に分けるのがふつうである。<sup>(12)</sup>

前置成分になるのは各種の副詞と一回体の「一」であり、後置成分は数量補語、形態構成と造語のサフィクス、動作の数量性をもつ構成、それに動詞の後、文の終りにおかれる前置詞・後置詞構造である。

条件のひとつは形態論的にみられるし、その他はシンタックス的にみられる。形態論的なものは形態構成のアフィクス、動詞の造語的構造である。その他はみなシンタックスの条件となる。

「被」とともにある動詞がはたらくために必要な上記の条件はつとに中国の文献にみえているが、それらには何の必要性があり、どんな役目をしているかは不明だった。上述のように「被」は主として動詞に「密着」していることから、また受動態の特徴となる諸関係をつたえられることから、動詞のある特定の形態構成の方法とみなすことができそうである。しかし上記の条件があるので、疑問の余地がある。

実際、「被」を動詞と用いるのに何らかの条件が必要だとすれば、それを動詞の形態要素、動詞の形態構成の方法とみなせるだろうか。もしこのような構造が必要欠くべからざるものとすれば、「被」がひとつの動詞につき、「動詞+前置詞・後置詞構造」にはつかないとみなせるだろうか。もしも

(11) 王还, “把”字句和“被”字句, 上海, 新知識出版社, 1956, 36頁。

(12) 同上。

「被」が単語の結合を支配し単語を支配しないようだとすれば、これを形態要素とみなせるだろうか。

動詞についての「被」のはたらきのあれこれの条件を考えると、「被」と動詞のむすびつきの性質にかんする問題に答がでてくる。

### 動詞の造語構造とその形態

「被」と共に用いられる動詞は構造からいっても形態からいっても多様であり、単音節のもあれば二音節のもあり、形態をもっているものもあれば形態のないものもある。

#### 単音節動詞

但是他害怕会被人笑。(巴金, 霧雨電, 326)

他被这些人三番五次地罵, 忍不住要发火。(王还, 37)

我得直接的捉人, 或是被捉, 我比他們明白一些。(老舍, 24)

#### サフィクスのついた単音節動詞

这篇故事講一ヶ皇帝, 最喜欢穿新衣服就被两ヶ騙子騙了。(叶聖陶, 童話選, 0040)

自己的先生被杀了。(魯迅, 朝花夕拾, 范愛农, 0095)

只有…这两ヶ院子…没有被他們燒过。(赵树理, 125)

その成分が連合関係にある二音節動詞(以下これをB型の動詞という)

B型動詞は零形態(サフィクスがない)をとれる。

大家接着就預測…家族将被連累。(魯迅, 朝花夕拾, 范愛农, 0064)

你也很快的就要被包圍。(林海雪原, 340)

我和三爸說了, 卻被严正地駁斥一番。(巴金, 家, 323)

我底理智則常被感情征服。(巴金, 家, 194)

#### サフィクスのついたB型動詞

鳴風的死和婉儿底嫁很快地就被人忘記了。(巴金, 家, 234)

連他們底房間也暫時被較熟一点的客人佔据了。(巴金, 家, 247)

その成分が結果と関係ある二音節動詞。第二の成分が第一の成分の結果、達成された動作をあらわす動詞がこれである（以下これをD型動詞という）。

D型動詞は零形態をとれる。

声音被石壁擋住（巴金，家，140）

D型動詞はサフィクスをとることができる。

他底膀子却被覺慧抓住了（巴金，家，272）

第二の成分が方向のサフィクスの二音節動詞（以下これをF型動詞という）。

他們…終于被我們底人趕出去了（巴金，家，46）

方向のサフィクスのつく動詞はいわゆる結果動詞と共通の特徴があり、いずれもその構造によって結果の意味をあたえ、補助詞的要素の「不」「得」を中に加えることができる。これは動作の完成の客観的<sup>(13)</sup>可能と不可能をあらわす。

圧縮した方向のサフィクスがついているばあい、たとえば「出」「上」のように実体的意味の「出る」「上る」などの動詞と相応しているものは、大体において構成の性質を確定しがたく、方向のサフィクス（圧縮されたもの）のつく動詞か、それとも第二成分——運動をあらわす動詞的モルフェーム（たとえば「生出」「拿出」）のある結果動詞かは判別しがたい。

いくつかの方向をあらわすサフィクスは方向の意味を失ない、結果体の附加成分（показатель）<sup>(14)</sup>に変わる、つまり混合した（語の構成と形態構成の）<sup>(15)</sup>性質をもつ結果動詞の成分となる。

その成分が限定関係にある二音節動詞（以下A型動詞という）

(13) ベ・イサエンコ，エヌ・コロートコフ，イ・サヴェートフーチェン，中国語教科書，エヌ・コロートコフ編，モスクワ，1954，357，377-379（以下，中国語教科書とよぶ）。

(14) 同上，357。

(15) ヴェ・エム・ソーンツェフ，現代中国語概論，モスクワ，1957，112-114頁。

大女儿被騙<sub>。</sub>賣<sub>。</sub>后自杀

你必須把話說清楚，不然就很容易被他們誤解<sub>。</sub>（王还，37）

その成分が動作とその目的語（объект）となっている動賓関係の二音節動詞（以下C型動詞という）

这时候他們底行动完全不被人注意<sub>。</sub>了（巴金，家，246）

这ヶ消息終於被覺民知道<sub>。</sub>了（巴金，家，254）

以上の例からわかることは、原則として中国語のあらゆる語構成型の動詞は「被」と結合するということである。ここにまたA, B, C, D, F型のおりにつくられた単音節の非派生動詞と二音節の派生動詞（語根の前後あるいは中間に附加成分がついてできた動詞を派生動詞という）がある。「被」はD型動詞とF型動詞とはしばしばいっしょになるし、B型動詞と単音節動詞とあうことはまれであり、C型とA型とはおおむね用いられず、あるいはしごくかぎられたばあいにはしか用いられることはない。

動詞の定型性と動詞の構造間には緊密な関連がある。とくにD型動詞は零形態であり、その他の型の動詞やまた単音節のものが零形態であることは減多<sub>ゼロ</sub>にない。

一方では動詞の定型性と動詞の構造、他方では文の性質（あるいは動詞のはたらきの性質）の間にも緊密なむすびつきがある。

もしも文が独立したものであり完成したものであるとすれば、「被」のあるところであらゆる型の動詞がサフィクスの形態をとって用いられる。このばあいD型とF型の動詞だけが零形態をとる。

もし従属文（あるいは動詞が従属的地位にある）ならば、あらゆる型の動詞はサフィクス形態とサフィクスなしの形態をとれる。

動詞構造の相互依存性を条件づける理由を明確にしないうちでも異なった造語構造の動詞が独立文では各種各様につくられることは断定できよう。

なぜならD型とF型の二音節動詞は造語のアフィクスをふくみ、後者は「被」使用の形態的条件であって、これらの動詞がどうしてB型の単音節あ

るいは二音節動詞とは異なり、零形態で「被」と共に用いられるかが明らかだからである。

このほかにも動詞の構造と「被」が動詞と共にはたらく他の条件との間には一定の関係がある。

前置詞構造をふくむ文

但是已經买得車票的旅客也有不少被関在站里，不能出去（茅盾，第一阶段的故事，文光書店，114）

原来是鯽魚被扔在木桶里（叶聖陶，童話選，中国少年儿童出版社，0023）

上例では「被」とともに単音節動詞「関」と「扔」が用いられている。このばあい前置詞構造をすてるわけにはゆかない（それなしでは文が完結しない）。

无可奈何的冷笑被压住在喉头（茅盾，虹，開明書店，164）

このばあいは「被」とともにD型動詞の「压住」が用いられている（語幹の「压」とサフィクス「住」からなる）。この動詞の後には前置詞構造がつづいているが、これはとりさることもできて、文は語法的に完結する。

一个家人也被<sup>(16)</sup>杀死在后院里

ここでもD型の二音節動詞（杀死）が用いられているが、単語合成法によっており、動詞の後の前置詞構造はとりさることができる。

動作の性状描写のある構造を含む文

更多人被吓得失了魂似的乱嚷乱窜（茅盾，第一阶段的故事，文光書店，134）

張天保帶了妻子儿女，到天津告状，被迫害得家破人亡（張孟良<sup>(17)</sup>）

他底身子被压得不能够动弹了（巴金，家，90）

这些话被周氏和觉新听得清清楚楚（巴金，家，318）

張福田似乎被这两个奇怪的字刺激得头脑清醒些了（故事，29）

(16) 王还，“把”字句和“被”字句，43頁。

(17) 同上。

これらの文では単音節動詞（吓と压）またはB型の二音節動詞（迫害，刺激）の後にくる動作の性状描写のある構造をすてるわけにはゆかない。

以上の例でわかることは、動詞の構造と前置詞・後置詞構造あるいは動作の性状描写のある構造との間にはある関連のあることである。前置詞・後置詞構造も性状描写のある構造も、サフィクスと同じく、各種の構造よりなる動詞といろいろなかたちで関係をもつ。簡単文ではこれらの構造がD型とF型の動詞のばあいだけはぶかれる。このとき文は依然として独立した単位（それが普遍的ではなくなるが）のままである。しかし単音節動詞とその他すべての造語型の動詞のばあい、前置詞構造も性状描写のある構造もはぶくことができない。なぜなら簡単文をば独立の単位のようにあつかえないからである。

以上により単音節動詞と二音節動詞のB, A, C型は一定の条件のもとでのみ「被」とともに機能をはたすことになる。もしもaの後に二音節のD型とF型をのぞいた任意の動詞がきて、X (Y, Z)の後に「被」使用のシンタックス条件をつくる各種の要素がくれば、「被+a+X (Y, Z)」という構成になる。

「被」は単語または単語の結合とむすびつくか

《被+a+X (Y, Z)》構造の各構成成分間のむすびつきをどのように分類するかを明らかにし、また「被」が全体として《a+X》の構造と必ずむすびつくのか、それともただ a(動詞とだけ)むすびつくのかを確定することが必要である。例をみよう。

鯽魚…跳了好几回，都被高高的桶框擋住（叶聖陶，童話選，0023）

人圍得風雨不透，皇帝東撞西撞，都被擋回來（叶聖陶，童話選，0048）

張福田他們一夥五六人這時全都被擋在門外（叶聖陶，童話選，168）

これらの文で「被」の後には共通して第一の成分に「擋」のある構造が用いられている。つまり「擋住」の第一例では「擋」のあとに造語のサフィ



クス「住」がついて二音節動詞になっているし、「擋回来」では「擋」という成分に方向のサフィクス「回来」がついてそれにより三音節動詞になっている。

これらの二文では「条件」をつくる成分が複合動詞の一部となり、それに「被」がつく。

#### 擋在門外

このばあい成分の「擋」は単音節動詞であるが、その後には「被」のつく動詞使用の条件のひとつになっている前置詞構造がある。この構造は前の二例のように「擋」とともにもっと複雑な複合体の構成成分となっているのか。このばあい「被」は単音節動詞とはかかわりなく、複合体に関係するものとみなすことができるか。

「被」は動詞とだけ関係をもち複合体とは関係をもたないといったほうがよい。明らかにこういえる、前置詞構造も性状描写の動詞のある構造も「被」のつく同じような動詞の使用のため特殊な条件とはならないと。これらの条件では単音節動詞も他の型（D型もF型も入れて）の二音節動詞も用いられる。このほか明らかなことは、これらの条件は「被」のない能動態でも、単音節動詞あるいは二音節のB型の文で、また「被」のない文つまり能動態でも作用するために必要である。たとえばこういえる、「他擋在門外」しかし「他擋」とはいえない。「他底身子压得不能够动弹了」とはいえるが、「他底身子压」とはいえない。

しかし、これはまだ「被」が動詞（擋あるいは压）にのみ関係することを意味していない。いやむしろ反対で、「被」は《a + X》あるいは《a + Y》というぐあいになる。「被」はもしも文中に《被 + a + X》と共に《被 + a + Y(あるいはZ)》と《被 + a + 0》があるばあいだけaに関係する。この時、aは動詞で、Xはシンタックスの条件（前置詞・後置詞構造）となる成分のひとつ、Yはもうひとつの成分（後置詞的描写）、0はX, Y, Zの成分が一定の条件のもとでかけていることをあらわす。

言語材料はあたえられた条件にこたえる。《被 + a + X》(被擋在門外) という結合とともに《被 + a + Y》(被壓得不能够動彈了) もあることが上例にしめされている。いいかえれば, 上例の結合でいつもあるのが動詞 (a) で, その他の成分は相互に入れかわれる。

いまや規定しなければならないのは, 文中に《被 + a + 0》の結合が存在することは, 「被」が a にだけ関係するための有力な論拠になるかどうかである。なぜならひとつの成分 (X) が他の成分 (Y) に代ることは, おおむね, どうあろうとも成分が欠けていてもよいことにはならないからである。《被 + a + 0》の結合は従属文の述語となり, また定語や主語にもなる。たとえば,

我的机子被沒收不算, 你自己要吃大虧的 (田汉, 劇作選, 人民文学出版社, 277)

他害怕自己被誘惑 (故事, 227)

但是他害怕会被人笑 (巴金, 霧雨電, 326)

これらの例では従属文の述語に用いられている(「被」をともなった零形態で), これは二音節の B 型動詞「沒收」も単音節動詞の「笑」もおなじである。

同時又很起了对于被騙的病人和他的家族的同情 (魯迅, 小説集, 人民文学出版社, 4)

她怀着这些被侮辱的秘密 (茅盾, 虹, 開明書店, 17)

被打死的四十三个匪徒 (林海, 289)

これら三つの例では従属文の定語としてもちいられている(「被」をともなった零形態で), 単音節動詞「騙」も二音節動詞の B 型「侮辱」も, 二音節動詞の D 型の「打死」もおなじである。

以上の例ではみな動詞が「被」とともに用いられ, シンタックスの要素 X, Y, または Z がないし, また何らかの形態もない。これは, このような構造では何らかの形態が概して省かれているということではない, それはあ

りうるが、どうしてもそうなるものではない。

《被 + a (動詞)》の結合は主語になる。

被选的单是外国女人 (故事, 76)

《被 + a (動詞)》の結合は繫詞「是」のあるとき述語の名詞部分となる。

据说青年就是在这里被搶杀的 (霧雨電, 273)

したがって、言語の資材により「被」は必ず動詞 (a) とだけ結びつくと断定できる。動詞こそただひとつの成分であり、これなしに「被」は用いられない。「被」を用いるには動詞さえあればまったく充分である。

上の条件外で従属文 (あるいは従属の地位) で、「被」とともに動詞を用いられることは、文 (または動詞) の従属的あるいは独立した性質とある程度むすびついていることを物語っている。「被」はD型とF型の動詞と用いられるが、零形態をとり、どんな文でもよい (独立のあるいは従属的な文でも)。A, B, C型の派生動詞と単音節動詞が上の条件外で「被」とともに零形態で用いられるのは附属文においてだけであり、定語その他のはたらきをする (むろん、それらが零形態では用いられないという可能性がある)。

これはサフィクスのついていないD型とF型の動詞のときだけ、独立の完成した受動態文が可能であることを意味する。それ相応に形態化されないその他の動詞ではそうはゆかない。

これはまた、D型とF型の動詞だけが形態なしに独立の (受動態としても能動態としても) 文の述語のはたらきをする能力のあることを意味する。つまり独立した述語関係をもち、その他の動詞はそういう述語関係をもたないということである。

なぜならD型とF型以外の動詞は、みな独立の受動態文では必ず語形変化のサフィクスあるいは性状描写の構造あるいは前置詞構造をとる。なぜならこれらすべての「伴う」成分は動詞に独立した述語となれるようにさせる方法と考えられるからである。これらがみな必要なのは、動詞が独立の単純な受動態文ではたはらせるためである。

以上にみた条件はとくに動詞が機能をはたすためには本質上必須の条件である（受動態でも能動態でも），しかし動詞を「被」とともに用いるばあいの条件ではない。こうしてこれらの条件があることは「被」を形態要素とみなすための妨げにはならない。まして「被」がただひとつの動詞に関係し，単語の結合に関係するのではないという考えの妨げにはならない。

上述の条件（前置詞構造，性状描写の構造，造語と語形変化のサフィクス）とはちがって，他の条件つまり副詞と一回体の附加成分としての「一」は受動態文で動詞が独立の述語になれる方法とはみなせない。

なぜなら通常一回体の附加成分としてのアフィクス「一」は附属文でしか用いられないからであり，そのうえこれは常に文が終結していないことを示しているからである。たとえば，

我被他这么突然一問，当时也怔住了（王还，37）

后来被别的車一混，知不清了（鲁迅，小説集，292）

副詞も受動態文が終結していないことを示す。もしそれが一定の動詞について文の唯ひとつの構造上の成分であるならば，その文は常に附属文となるだろう。

他被这些人三番五次地罵，忍不住要发火（王还，37）

このような条件のもとで「被」は動詞とともに機能をはたすことになる。

#### 「被」とむすびついた動詞につくアフィクスの語法的意義

語法的性質上異なる「被」のはたらきの条件（シンタックスと形態論の）には，そのいずれのばあいにも同様に「被」を動詞とともに用いられるという何か共通なものはない。

たとえば動詞（D型またはF型）の形態的な型の間，形態構成のアフィクスと前置詞構造間の共通なものは何か。形態的条件つまり形態構成のアフィクスをしらべてみよう。

上述のように「被」と結合する二音節動詞のうち、D型とF型の動詞だけが零形態<sup>(18)</sup>でよい、というのはD型動詞では構文自体によるからである。F型動詞では方向のサフィクスのたすけ<sup>(19)</sup>で（実際はまた構文により）結果があらわされる。このような動詞にはサフィクスの「了」をつけることができる。このばあいには結果の意味の外に、完了体のサフィクス「了」により完了の意味がさらに補足される。

その他の二音節動詞は、単音節動詞とおなじように、多くのばあい語尾形態をとり、次のようなアフィクスのひとつがつく。

「了」たとえば自己的先生被杀了（魯迅，朝花夕拾，范愛农，0065）

「过」これは完了体<sup>(20)</sup>をあらわす方法となるが、非完了・多回体（そのふつうのはたらき）ではない。

只有…这两ヶ院子…没有被他們燒过（趙樹理，三里湾，125）

「过」はしばしば形態構成（語形変化）の成分とならず、「被」とともに用いられており、結果動詞の造語成分になる。このばあい「过」はまた多回性とは無関係である。

結果の成分としての「过」のつく動詞は結果動詞に共通な特性をもっている。それらの構造には結果体の意味があり、構成成分の間に否定詞の「不」を挿入できる。

我被劝不过答应了（魯迅，小説集，234）

鶴亭被他追問不过，只得直說了（王还，43）

一回体のプレフィクス「一」<sup>(21)</sup>（このばあい文は未完成である）。一回体の

(18) ヴェ・エム・ソーンツェフ，中国語の単語と語根の問題，Канд. Дисс.（タイプライター），モスクワ，1953，843頁；エス・イエ・ヤホーントフ，中国語の動詞範疇，Канд. Дисс.（タイプライター），レーニングラード，1957，92頁。

(19) 中国語教科書，357頁。

(20) エヌ・エヌ・カロートコフが中国語のサフィクス「过」のこの役目をみとめている。ア・ア・ドラグノフ，現代中国語文法研究，モスクワ——レーニングラード，1952，130頁。

(21) 王还，把字句和被字句，37頁。

動詞はいつでも附属文中にある。主文に表わされるものは附属文の第一の動詞の動作の結果発生することであるのが普通である。<sup>(22)</sup>それゆえ附属文にて「被」とともに用いられる動詞のあらわす動作は、いつでも完成されたものでなければならない。

李成功被他一説，倒愣住了<sup>(23)</sup>（陳登科）

このほか一回体が別にあらわされる単音節動詞が「被」とむすびつく。

「中国語教科書」では、単音節動詞が一回性をあらわすために三種の方法があるとしている。<sup>(24)</sup>1) 数詞「一」をおくか、またはそれなしで動詞を重ねる。2) 一回の意味のある単語を動詞の後におく。3) ある動作の道具を意味する単語をおく。

「被」とむすびつく単音節動詞では一回性は次の二つの方法でしかあらわせない。<sup>(25)</sup>

好像被看不見的手推了一下（虹，243）

可是忽然她被推了一把（故事，239）

サフィクス「着」は次のような単音節動詞と二音節のB型動詞につき、「被」とむすびつく。

1. 迫る意味の動詞，「迫」，「逼」，「逼迫」，その後には動詞の補語がつづく。「被」は迫る意味の動詞にだけ関係する。

最后一批…妇孺…被迫着，回本国去（故事，121）

他还被逼迫着来看另一些…青年的生命（巴金，家，307）

このばあいの「着」は持続をあらわさないことは明らかで、それゆえ持続態ではない。これはある状態の表示（描写）とむすびつくようである。も

<sup>(22)</sup> 「一回体の形式も複文の第一構成部分となる。複文の第二の部分はこのばあいには一回体の形式が意味する動作の結果、思いがけずあらわれる何物かである……」（エス・イエ・ヤホントフ，中国語の動詞範疇，153頁）と比較せよ。

<sup>(23)</sup> 王还，把字句和被字句，40頁。

<sup>(24)</sup> 中国語教科書，240，241頁。

<sup>(25)</sup> 一回体の二音節動詞が「被」と結合することはまったくない。

っともその使用という点からいえば、迫る意味の動詞では「着」よりもっと頻繁に用いられる「得」を忘れるわけにはゆかない。

2. ロシヤ語の副動詞に似たはたらきをする動詞、つまり主要動詞の定語となるもの。「被」は副動詞的動詞に関係する。

她…被这灯光引誘着輕脚輕手地走到了覺慧底窗下（巴金，家，203）

「被」とむすび「着」のつく動詞は大体において無制限である。これらが「被」と用いられることはめったにない。

例

单音節	二音節
割 ge	包圍 baowéi
握 wò	拉扯 lāchē
吹 chuí	支持 zhīchí
留 liú	折磨 zhémó
罩 zhào	鼓舞 gǔwǔ
	苦惱 kǔnǎo

など。

「被」とむすび「着」がつくのは通例三項構造の動詞である。つまり文に動作の主体を意味する単語のあるばあいである。このばあい決して動作の習慣性、あるいはそれを完了する準備については関係がない。つねに「一定の瞬間に進行する動作であり、<sup>(26)</sup> 経常的ならざる動作である…」

她又看見自己被許多人拉扯着（虹，44）

もうひとつ注意せねばならぬばあいがある。それは「着」zho (zhao)<sup>(27)</sup> が複合動詞の造語成分となり、動作のある結果の「達成」を意味しているときである。このばあい「着」は Zháo と発音する。

(26) エス・イエ・ヤホントフ、中国語の動詞範疇、139頁。

(27) エス・イエ・ヤホントフ、中国語の動詞範疇、378頁。

我又会被嫂嫂她们纏着（巴金，家，281）

以上のことから「被」とともに用いられる動詞と、そのアスペクト（ВИД）の意味の間には従属関係のあることが明らかである。基本的にこれらの動詞には次のようなアスペクトが特徴である。a) 結果， b) 完了， c) 一回， d) 持続。これらのアスペクトの動詞は一般的に長い時間の過程を意味しないで，ある瞬間に進行したり進行している過程である。このような動詞の動作は長時間でも多回でもありえない。それは単一の具体的な行為で，ふつうは短時間であることが特徴である。

結果アスペクトの動詞は唯一の動作もくりかえされる動作もあらずが，「被」とむすびついた時はいつでも唯一の動作をあらわす。

完了アスペクトの動詞（サフィクス「了」のついた）は，周知のように「唯一の具体的な動作の完結<sup>(28)</sup>」をあらわす。ヤホントフは「了」が過去完了をあらわす方法になるとして，こう書いている。「動詞は過去完了において唯一の（つまりくりかえされない）動作をしめす<sup>(29)</sup>…」。

一回アスペクトの動詞は動作の完了の一回性をあらわす。

「被」とむすびつく持続アスペクトの動詞が，ある瞬間に進行する動作をしめすことは上述のとおりである。

「被」とむすびついた動詞のこういうアスペクト構成は，あきらかに「被」自体の起源，および本来の措辞上の意義によって説明がつく「被を動詞のプレフィクスとみなしうるか」の項をみよ。

したがって王力教授が英語と中国語の受身の不一致点に注目して引用した三つの英語の受身文を「被」をもちいて中国風に表現してならぬことはいうまでもない。*Jill is loved by Jack* を「被」を用いて中国語に訳してはいけない（綺兒被傑克愛）。

しかし，この文は中国語の受身構造の「為…所」で綺兒為傑克所愛とい

(28) 中国語教科書，213頁。

(29) エス・イエ・ヤホントフ，中国語の動詞範疇，115頁。



える。

また The house is surrounded by firs and birches. を房子被樅樹和樺樹環繞ともいえない。

しかし、これもまた「為…所」を用いて、其宅為樅樹所環繞とすることができる。

最後に、He is admired by everybody. も「被」を用いて他被人人欽佩<sup>(30)</sup>とはならないが、「為…所」により彼為举世所欽仰となる。

上にあげた英語の例では、動詞は持続の過程をしめし、唯一の具体的行為ではなく、つまり to be loved (быть любимой), to be surrounded (быть окруженным), to be admired (вызывать восхищение), である。

したがって、動詞が動作の唯一性と短時間性をあらわすばあいだけに用いられる「被」を使用して以上の三文を訳すわけにゆかない。これらの文は「為…所」を用いれば訳することができる。というのは、この構造は恒常的な描写、持続的過程に用いられてよいからである。王力教授が動詞のもったアスペクトの意義・色彩をあらわす本源の意味によって「為」はよろしいが、「被」はいけないと説明しているのは正しい。

「被」は「受ける」という意味の動詞からでて<sup>(31)</sup>いる。このことからある瞬間にたいする動作の関連がでてくる。これにより「被」が動詞のあるアスペクトの意義・色彩とむすばれていることがあきらかである。<sup>(32)</sup>

「被」は「是」の意味をもつ動詞から発生した。<sup>(33)</sup>したがって「為…所」構

(30) 王力, 中国語法理論, 上冊, 上海, 商務印書館, 1957, 181-182 頁。

(31) 王力, 漢語史稿, 中冊, 北京, 科学出版社, 1958, 425 頁; 剂世儒, 被動式的起源, 語文學習, 1956, No. 8, 32 頁。エヌ・エヌ・コロートコフ, 歴史シンタックス (タイプライター), モスクワ, 1947。

(32) したがって零形態で持続過程をあらわす「愛」は「被」と同時に用いられないが、アスペクト<sup>ゼロ</sup>の意義・色彩が違って、唯一の行為をあらわしはじめると、しごく自由に「被」がつく。たとえば、他被愛上了といえる。

(33) 高名凱, 漢語語法論, 开明書店, 北京, 1951, 399-401 頁。「為…所」構造のなかの虚詞「所」は動詞の前において、それにより一種の形動詞形態をとる。「中国語教科書」では関係代名詞とよばれているが、これは「動詞の前におかれ、動詞のあらわす動作の客体を表現している」からである (455 頁)。こうして「所」は動詞のもとにおいて一定の動詞性をとりのぞき、それが繫詞「為」とともに用いられるのを助ける。

造が動作の恒常的描写とむすびついていることがわかる。興味あるのは、英語でも受動態文の恒常的描写をなすのに繫詞の成分 to be の方法によっていることである。

現代語で「被」は事実上持続過程を意味する動詞に用いられない。ここでは「為…所」構造を用いた一種の恒常的動作を問題としよう。たとえば、

如此残酷野蛮的迫害，実為文明人類所不能容忍（中華人民共和國对外關係文件集，以下文件集と略す，第一集，北京，1958，195）

…这个灵魂要不為世上任何汚浊，物欲所熏染

たとえば、同一の文で「被」（結果のアスペクトの意味をもつ二音節動詞で）と「為…所」構造（持続過程をしめす単音節動詞で）は、いかに多様に用いられるかをみよ。

たとえば、

提案不完全為美国政府所喜，遂被分裂為两个提案（文件集，192）

「為…所」構造とともに「被…所」構造も用いられるが、これは一般にみとめられているところでは「被…所」構造との類推から発生した。<sup>(34)</sup>  
アナロジー

几天来的疲劳全被欢笑所吞蝕（林海，345）

脑子里的思欲頓時被这个美麗的小女兵所占領（林海，308）

とくに、虚詞「被」と「被…所」のちがいは各種の否定を用いた時にはっきりとあらわれる。たとえば、「被」は基本的に「没」<sup>(35)</sup>とむすぶが、「不」（これは動作の習慣性を否定する）とはむすびつかない。

「中国語教科書」はこれらの否定詞につき、ある程度述べている。「否定文ではアスペクトの差異が次の三方法であらわされる。a) 動作の經常性（習慣性）あるいは近き将来に動作が完了するばかりのときは、動詞の前に「不」をおいて否定する。b) 過去のある時における動作の完了した具体的

(34) 刘世儒は「被動式的起源」で、「被…所」構造は六朝時代（229-589）にはじめて現われた、と述べている（「被動式的起源」32頁）。

(35) 「被」とともに「没」を用いる多くの例は現代中国語辞典のひな型にみえる。「語文學習」，1958，No. 9，29頁をみよ。

事実は「没」が「没有」で否定する。<sup>(36)</sup>

「不」はまた「被…所」構造の前にも用いられる。

几天来的疲劳决不能被欢笑所吞蝕

「被…所」構造は単音節動詞と二音節のB型動詞にだけ用いられる。その他の型の二音節動詞、つまり動詞のアスペクトの意味が状態の表現と両立しないが、それにもかかわらずそれを伝えねばならない時、「是…的」構造を用いる。これには「被」とむすびつく動詞がつらなる。たとえば、

…你是怎样被人杀死的(巴金, 家, 280)

地方都是已经被佔据了的(巴金, 家, 278)

这不全是被酒烧着的, 这是被熱情烧着的

上にあげた構造の第一文では結果動詞の「杀死」が、第二文では完了体のサフィクス「了」がつき、第三文では造語サフィクス「着 zháo」のついた結果動詞がつらなる。つまりこれらの動詞はみな恒常的描写と両立しないアスペクトの意味がある。

多くのばあい「被」とむすびつく動詞の動作は過去のものであるが、現在と未来でもよい。

赵恩柱は「被」はおおむね未来では動詞とともに用いられないとみなして、ここに「被」と「由」のちがいをみている。<sup>(37)</sup>「由」という補助成分は過去でも未来でも動詞とともに用いられて何の制限もうけない。このほか「由」が「被」と異なるところは、命令文で用いられることである。<sup>(38)</sup>

我所想作而不能作到的, 該由他来替我完成罢(巴金, 家, 33) (「由」は命令文で用いられている。)

我底亲事应由我自己作主(巴金, 家, 254) (未来が具体的にあらわされているこの文で、「由」は「作主」という動詞とともに用いられている。)

<sup>(36)</sup> 中国語教科書, 200頁。

<sup>(37)</sup> 赵恩柱, 談受, 挨遭, 和由; 中国語文, 1956, No. 11, 49頁。

<sup>(38)</sup> 王还, 把字句和被字句, 42頁。

「由」は独立した文で、形態化されない動詞と自由にむすびつく。

命令文でも、動作が未来にかかわる文でも、動詞は零形態であるから(上例をみよ)、それらの文に「由」をおくことはまったく自由であるが、「被」をおくのは習慣的でない。しかし、動詞が相応する構造をもつなり、あるいは語尾(動詞の動作を未来に関係づける)がついているばあいには、この種の動詞の前に「被」をおくことができる。たとえば、

敵軍即将被我截成两段，包围，歼灭(故事，139) (「被」はF型，B型，D型の動詞と用いられ，それらの前には未来をあらわす「将」がある。)

それゆえ、一定のサフィクスあるいは造語構造の存在という「被」が動詞とともに用いられる形態的条件は、動作の短時間性と唯一性の原理を変える動詞のアスペクトの関連性の表現ということに帰する。もしも動詞が動作の唯一性と短時間性の意味をもたないならば、そして上述のアスペクト(結果，完了，一回，継続)のうちのどれひとつとも両立しなくなれば、「被」とともに用いてはいけない。

たとえば、「听」という動詞は持続過程を意味する。したがって零形態では「被」とともに用いられない。しかし、「被他听了」，「被他听见了」とはいえる。このばあい動詞は唯一の行為をあらわしている。

「看」という動詞は「被」とともに用いられないが、「被他看见(了)」といふことはできる。

「信」，「希望」という動詞の意味は短時間性と唯一性の意味とは両立しない。したがって，これらは「被」とともに用いられない(零形態の結果動詞はどれもそうである)。

しかしこれと反対に，動詞から出ていないが「動詞化」された言語単位が「被」とむすぶために必要な一定のアスペクトの意義・色彩をもつ時には，「被」とともに用いられる。

但朝鮮战争是被扩大化了) 文件集，207) (このばあい「扩大化」にはサフィクスの「了」がつき，それによって動詞化され，「被」にむすびつく。)

「被」を動詞とともに用いる形態論的条件とシンタックスの条件（前置詞構造、性状描写の構造）では、おおむね、そして他のばあいでも通常は完了の意味がある。

完了の動作の意味が形態論的方法（アスペクトの意味でもある）でつたえられる形態論的条件とはちがって、シンタックスの条件では記述的につたえられる。

この点では「被」が附属文で零形態の動詞とともに用いられるのは面白い。こういう動詞は基本的に「限度ある」(предельный)ものである（ヤホントフはこう名づけている）。これらの動詞は文中に用いられると、唯一の行為をあらわし、ある結果にかんする表象ときりはなせない。「この結果に達した後は、動作はつづかない」<sup>(39)</sup>。

したがって、こういう動詞のあらわす動作は完了のものがふつうである。

そのほか、附属文では動詞が「被」をともなった零形態であり、その時には動作の完成はコンテクストから出てくる。

この点で動詞とともに「被」を用いる条件として数量補語のあることが説明できる。数量補語はそれ自身が動作の完了をあらわすから何回かの動作の完了をしめす。

完了の意味は「没」または「没有」をそえる方法であらわすことが非常に多い、「動詞+被」という結合の特徴である。

她又去检查她的杂志，有没有被老鼠咬（虹，64）（附属文には単音節動詞の「咬」が零形態であらわれている。そして「被」の前には述語を疑問にする「有没有」がある）。

(39) エス・イエ・ヤホントフ、中国語の動詞範疇、81頁。——非派生の動詞（単音節の）それにまた複音節の非結果動詞（B型動詞）の本質にかんしては、動作の完成の色彩をあたえる。ア・エム・ツカノフ、現代中国語における「了」のついた動詞の形態と若干のアスペクト問題、Канд. Дисс. (タイプライター)、モスクワ、1955。

再び動詞と「被」の結合の問題にたちかえって、「被+動詞」(もしこのようにあらわれるとすれば)の形式が「被」のない形式とどのように比較されるかをしらべねばならない。「被」と動詞の結合の形態論的性質について語るためには、「被+動詞」の結合が能動態(「被」なしの動詞)と厳密に入れ代らねばならない。言語にははっきりと相対する能動態があるのであって、それがなければ受動態もないはずである。

周知のように対応する能動態, 受動態の根本には動詞の及物性の範疇がある。能動態の及物の動詞からは自由に受動態の形式がつけられねばならない。受動態の動詞をもつ文はその同じ動詞が能動態で用いられている他の文にもどされるはずである。中国語には及物性の範疇が存在するのか, 動詞が「被」とともに用いられる文が, 「被」なしの文と相互交代できるのか(中国語の受動態文と能動態文は相互に交替できるのだろうか)。

#### 受動態に用いられる動詞の性質

中国語の研究家はみな「被」が他動詞とともに用いられることをみとめて<sup>(40)</sup>いる。これは疑問の余地のない絶対の事実である。中国語では何が他動詞か。最もありふれた観点は次のとおりである。すなわち, 他動詞とはその動作が物または人を指し, それにこの動作が及ぶ動詞のことである。形式上この動詞の特徴は, この動詞の作用する客体(このばあい前置詞なしに支配する)をしめす直接補語がその後にくること, また, この補語を「把」を用いて<sup>(41)</sup>前に移せることである。

(40) 王力, 中国現代語法, 上冊, 商務印書館, 上海, 1947, 172-182頁。呂叔湘, 朱德熙, 語法修辭講話, 115-121頁。エヌ・ヤ・ビチューリン, 中国語文法, セントペテルブルグ, 1835, 85, 86頁。ペ・エス・ポポフ, 中国語研究簡論, 横浜, 1908, 63頁。ペ・ペ・シュミット, 官話文法試論, ウラジオストーク, 1915年, 333頁。

(41) ア・ア・ドラグノフ, 現代中国語文法研究, 119頁。エス・イエ・ヤホントフ, 中国語の動詞範疇, 37頁。エヌ・ヴェ・ソーンツェワ, 中国語の主語動詞文の規定規準, —「中国語文法のいくつかの問題」集, モスクワ, 1957, 29頁。ヴェ・エム・ソーンツェワ, 中国語文法概論, 122-127頁。エヌ・ゲ・ラニンスカヤ, 現代中国語における虚詞「把」, Канд. Дисс. (タイプライター), モスクワ, 1953。

この観方にはわれわれも賛成する。

「被」のある文では主語になるのは動詞の作用をうける客体である。動詞の動作をうける客体のある動詞が他動詞であるがためには、次のことを確定しなければならない。つまり「被」をともなる一定の文には、客体を意味する名詞が動詞の前にあるか、それとも後にあるか（「把」によって前におかれて）相対する能動態が存在するかということである。

「被」をともなる動詞のとき客体を意味し、また主語となる単語はみな能動態文では、これらの動詞の後におかれる。たとえば、あらゆる受動態文の主語は能動態文の補語となる。

皇帝…被騙了——騙皇帝

院子…被燒——燒院子

先生被杀了——杀先生

他們被趕出去了——趕出去他們

それゆえ、「被」をともなる受動態文「客体+被+主体+動作」と同時に、それに相対する能動態文「主体+動作+客体」が存在する。しかし、必ずしもこの相対する文をつくれるとはかぎらない。書きかえができない場合というのは、動詞の後に前置詞・後置詞構造があるばあいか、または「得」の助けをかりて導入された後置詞的描写があるときである。このばあい相対する文がないということは、どういう条件によるのか。それはこの文章の動詞が他動詞でなく、主語となる名詞がこの動詞の動作の客体でないということではなかろうか。たとえば、

…自己被包圍在霧里（巴金，秋，92）

你也很快的就要被包圍…（林海，340）

はじめの例では客体を意味する名詞が動詞の後にくるという相対する文をつくれぬ。動作の客体「自己」は「包圍」という動詞の後にも前置詞構造「在霧里」の後にもおけない。

これによって動詞が他動詞でないという結論をだすとすれば、同じ動詞

が用いられている相対する能動態の文の存在を説明できないだろう。たとえば、第二の例では対応する文があって、動詞「包圍」の後に客体の「你」をおける。

相対する能動態文と「被」をともなう文があるかないかは、まったく後者の構造によるものであって、動詞の性質（他動詞か自動詞か）によるのではない。

他動詞の後には直接補語、あるいは前置詞・後置詞構造、または数量補語等々がある。このばあい、もし同時に直接補語と数量補語、あるいは直接補語と性状描写を用いねばならぬとすると、動詞を重ねるのがふつうである。たとえば、

他看这本书看了三次（「看」の後には直接補語の「这本书」がつづき、数量補語の「三次」は二回用いられた動詞の後にくる）

他写这些字写得好看（はじめの動詞「写」の後には直接補語「这些字」がつづき、第二の「写」の後には動作の性状をしめす構造がおかれる）

もしも「被」のつく文をつくる必要があれば、その終りに第二の動詞の方法を用いて動作の性状描写をおく。このばあい構造の成分は、客体を意味する名詞が動詞の後にくる能動態文を「被」のつく文にかえる妨げにはならない。

老爷爷…已被打得动不了（儿女，24）は次のように書きかえられる。打老爷爷打得（他）动不了（ここでは「打」がくりかえされている。第一例では後につづくのが直接補語であるが、第二例では動詞の性状描写である）。

したがって、客体の名詞が動詞の後にくる相対する能動態文がないことは、文の構造と関係している。<sup>(42)</sup>

（一定の構造の文で）客体を意味する名詞がその動詞の後にくると、その

(42) 単語を自由に並べられるロシア語には、こういう現象がない。受動態文は構造的にいつでも任意の能動態の文をとれる。ロシア語では（中国語でもそうだが）意味によって書きかえができないが、これについてはここではふれない。



動詞は他動詞といえる（もし名詞が動詞の後にくるといふ動詞の及物性を規定する第一の規準から出発すれば）。

文を書きかえるばあい「把」をもちいて客体を意味する名詞を動詞の前にうつすことができるかどうかを明らかにする必要がある（これは動詞の及物性の規定を可能にする第二の規準である）。

ここにいくらか他の情況がある。文の構造の観点からすれば、このばあい「被」のついた文を対応する「把」をともなう文にかえるためにはほとんど何の障害もない。

後置される動詞の性状描写のある文は、つねに再構成される。

更多人被吓得失了魂似的乱嚷乱窜（故事，134）

…把老孙头吓的跌下了車子（暴風驟雨，0125）

前置詞・後置詞構造をもつ文は、つねに対応する。

旅客也有不少被関在站里（故事，114）

我就把她们関在这里（巴金，32）

二音節あるいは単音節のサフィクスのついた動詞のある文もみな対応する。「被」のつく文中にサフィクスのない単音節動詞があるばあいだけは、このような文に対応する組をとることはできない。たとえば、但是他害怕会被人笑（霧雨電，326）という文では「把」をともなう対応する文はできない。

「把」と「被」をともなう文との間に相互関係がないことは、文の異なった構造で説明されるのではなくて、これらの文に用いられている他動詞の型の相異で説明される。

二重補語の動詞の時には対応する文をつくれない。

从前我被老百姓問起来兑是难為情的（田汉，剧作選，人民文学出版社，315）

我被他这么突然一問，当时也怔住了（王还，37）

李成功被他<sup>(43)</sup>一説，倒愣住了。これら文の客体になっている代名詞の「我」と個有名詞「李成功」は「把」といっしょに用いられない。それというのは、これらの客体が間接目的語<sup>(44)</sup>であって、「把」とともに用いられるのは直接目的語にかぎるからである。

祈求動詞のばあいも対応する文はつukれない。

我被<sup>(44)</sup>劝不过，答应了（魯迅，小説集，234）

主子們被請了<sup>(44)</sup>出来（巴金，家，88）

两国<sup>(44)</sup>兌理認為原子能應該只允許用于和平的目的和為人类謀福利

一營兵終於被<sup>(44)</sup>海軍砲逼回去（故事，151）

祈求動詞はみな客体をしめす名詞を「把」の助けを借りて動詞の前に移せない。この種の動詞ではおおむね「把」を用いられない。この事実から若干の研究家は勧める意味の動詞を間接・他動詞（косвенно-переходный глагол）<sup>(45)</sup>とみなさねばならぬと結論している。

「被」と「把」をともなう文は、なおもうひとつのばあいにも対応しない。

多くの研究家のみとめるところでは、「思想」「感情」「説話」の精神行為の動詞とともに「把」はまったく用いられないか、<sup>(46)</sup>用いられるにしてもごくまれである。<sup>(47)</sup>「被」となると、この種の動詞とともに用いられることが非常に多い。たとえば、

張福田被<sup>(47)</sup>笑得心慌（故事，99）

我怕被<sup>(47)</sup>你看見（巴金，短篇小説集，287）

轻声点，不要被人<sup>(47)</sup>听见（巴金，家，324）

(43) 王还，把字句和被字句，40頁。

(44) ふつう間接目的語になるものは、名詞（動作をうける人をあらわす）で、それは間接の定向性の前置詞により動詞の前に移せる（「中国語教科書」325頁を見よ）。

(45) エス・イエ・ヤホントフ，中国語の動詞範疇，44-48頁。中国語教科書，325頁。

(46) 王力，中国現代語法，165頁。

(47) 呂叔湘，汉语語法論文集，北京，科学出版社，1955，128頁。

她底事情已經被那人知道了 (巴金, 家, 205)

「被」はそのままの形態の上述の動詞とともに用いられる。

「被」とともに用いられる「思想」、「感情」、「説話」の動詞を一覧表にしてみると、

懂得 (巴金, 家, 250)

吓 (故事, 134)

騙 (虹, 99。魯迅, 小説集, 4)

仇視 (魯迅, 小説集, 315)

侮辱 (虹, 17)

駁斥 (巴金, 家, 323)

知道 (虹, 41)

誤 (魯迅, 小説集, 4)

痛罵 (巴金, 家, 209)

忘卻 (巴金, 44, 32)

忘記 (巴金, 秋, 65)

忘掉 (巴金, 4)

遺忘 (巴金, 12)

明 (故事, 69)

証明 (人民日報, 20, IX, 1952)

溺愛 (霧雨電, 78)

覺察 (巴金, 家, 89)

誘惑 (故事, 227)

駁倒 (虹, 226)

紀念 (呂叔湘, 朱德熙, 118)

尊敬 (同上)

嘲笑 (巴金, 家, 268)

そこで、「被」と「把」をともなう文は、次のばあいの動詞では対応し

ないようにみえる。

1) 二重補語の動詞のとき。「被」と「把」は各種の目的語を条件づける。

2) 祈求動詞のとき。「被」は用いられるが、「把」は用いられないか、用いられるとしてもごくまれである。

3) 「感情」、「思想」、「説話」の動詞では「被」だけしか用いられない。

以上により明らかなことは、「被」は「把」より見当ることはずっと少ないとはいえ、利用範囲はずっとひろいことである。

「把」とともに用いられる動詞の動作の客体を意味するすべての名詞は、「被」をともなう文では主語になれる。「把」をともなう文(能動態)でも「被」をともなう文「受動態」でも、その中にある動詞は他動詞とみなしうる。

動詞の及物性を規定する第二の規準からこういうことになる。

この観点から次のような断定は正しいであろう。「中国語で直接補語とみなされるものは、動詞の後ばかりでなく動詞の前(前置詞「把」をともなう<sup>(48)</sup>て)に位置し、これに受動態の主語が対応する」(「被」をともなう文を考えに入れて——著者)

こうはいつでも「反対のばあい」はない、というのは「被」をともなう文のあらゆる主語に「把」をともなう文が対応しないからである。これらのばあい「被」をともなう文の動詞は他動詞であるとはいえない。上述のようにこれはみな間接の定向性動詞(二重補語動詞と勧める意味の動詞)、間接・他動詞である。そのとき主語になる名詞は間接目的語である。

「被」をともなう文で主語になるのは、ふつうは直接目的語(このあばい「把」のつく文もつくれる)となる名詞である。

しかし、「被」をともなう文の主語に、間接賓語となる名詞でもなれる。(このばあいは「把」をともなう文が対応しない)。

(48) エス・イエ・ヤホントフ、中国語の動詞範疇、37頁。

受動態構文の主語に間接目的語になるのは多くの言語にもある。英語では受動態の構文で間接・他動詞がひろく用いられているという一般的な特徴がある。このばあいには間接目的語になる単語がしばしば主語になる。

たとえばエム・エス・シャピロはこう書いている。「現代英語で受動態を用いる…基本的特徴はこのようなばあい、次の点にある。受動態は直接・間接ふたつの補語を支配する動詞でつくられる。その上受動態の主語に対応するのは能動態の間接補語である。直接補語はそのままでおり、受動態のいわゆる保留目的語 (retained object) になる。<sup>(49)</sup>

さらにア・ア・ポチェーブニヤはインド・ヨーロッパ語では、みな間接・他動詞が受動態の形式をとれることをみとめている。「受動態はあらゆるアリアン語の意味の面から、広い意味での他動詞の存在を予想している。つまり、対格を支配する客観的主動的な動詞、そして他の格では補語を必要とする客観的中性的動詞の存在を予想している。<sup>(50)</sup>

中国語の「被」をともなう文で主語になれるのは、こういう間接目的語だけである。動詞はそれを前置詞なしで支配できる。これは二重補語の動詞<sup>(51)</sup>や祈求動詞<sup>(52)</sup>でも可能である。これらは間接・他動詞でありながら、その後に関接補語(間接目的語)をもち、前置詞なしでそれを支配する。このばあいでも前置詞はおけるが必ずいるわけではない。<sup>(53)</sup>

(49) エム・エス・シャピロ, 現代英語における動詞の及物性と被動態の範疇, ——「学校の外国語」, 1956, No. 1, 21 頁。

(50) ア・ア・ポチェーブニヤ, ロシヤ語文法にかんする覚書から, 四巻, モスクワ, レーニングラード, 1941, 201 頁。

(51) 二重補語の動詞は多くの学者によって独特なグループに分けられている。たとえば黎錦熙, 新著国語文法, 122-145; ア・ア・ドラグノフ, 現代中国語文法研究, 113-127 頁; 中国語教科書, 322-325 頁。

(52) 「中国語教科書」の著者たちは、多くの祈求動詞を二重補語の動詞に関係づける。「こういう祈求動詞の動作は主体から客体へ、あるいは客体から主体への何らかの転化とむすびついている。たとえば「学」「問」など——「中国語教科書」325 頁。

(53) 二重補語の動詞では直接、間接の二つの目的語は直接動詞の後におかれる。間接目的語は前置詞の助けをかりて動詞の前にもおける。

直接・他動詞のばあいでも間接目的語（補語）をもてるが、このばあい前置詞は必ずしもいない。間接・他動詞とのちがいはここにある。

他動詞のばあい前置詞によってのみ能動態の構文に導入される間接目的語は「被」をともなう文の主語にはなれない。

母亲給（替）孩子們穿衣裳（ここで「穿」という動詞はふつうの直接・他動詞であり、間接目的語は前置詞を介して導入されている）。この能動態文はどんな条件のもとであろうとも、間接目的語の「孩子們」を主語にするために受動態に改めることはできない。

王力教授は英語の受動態を中国語の受動態とくらべて、The children were dressed every morning by their mother. を中国語訳するばあい「子供ら」を主語にするため、動詞の前に「被」をおくことはできないとしている。

孩子們每天早晨都被他們的母亲穿衣裳<sup>(54)</sup>

上述のように「被」と「把」は、若干のばあいその使用範囲は多様である。しかし、その他のばあいは他動詞とともに用いるという特徴がある。「被」、「把」と結合できるかによって、動詞を他動詞と自動詞に分けうると考えられる。「自動詞が他動詞とことなるところは、直接補語をおけないことであり（「被」を使用するものも含む。これは主語と動詞の間におかれて直接目的語をしめす）、また「被」をともなう文に用いられないことである。<sup>(55)</sup>

自動詞には「被」とともに用いられたばあい他動詞の意味になるという特徴がある。こういう動詞のとき目的語は大体において動詞の後にくるか、または「把」によって前にうつされる。

湖水象一疋白緞子鋪在地上有时被風吹着微微地飄动（巴金，秋，72）（ここでは自動詞「吹」が「被」とともに用いられており、このばあいは他動詞の意味になっている）。

(54) 王力，中国語法理論，182頁。

(55) エヌ・ヴェ・ソーンツェワ，中国語における動詞文の主語規定の規準，29頁。

風吹来外灘公園里的音樂（茅盾，子夜，1）（「吹」という動詞の動作の客体は動詞の後におかれている）。

風把刘代表的講話吹得断断续续的（周立波，28）（このばあいは「吹」が「把」とともに用いられている）。

したがって、次のように結論できる。

1. 「被」をともなう中国語では通常直接・他動詞が用いられる。
  2. 「被」とともに用いられるものにはまた間接・他動詞があり、これには二つのグループの a) 二重補語の動詞，b) 析求動詞がある。
  3. 「被」をともなう文では直接目的語が主語になる。
  4. 間接目的語も「被」をともなう文で主語として用いられはするが、それは間接・他動詞のときにかぎる。
  5. 「被」は現代中国語で自動詞とともに用いられるが、それは他動詞の意味をもったときだけである。
  6. 「被」はあらゆる語義グループの他動詞とともに用いられる。周知のように黎錦熙教授は、中国語の他動詞に最も完全な意味論的分類をあたえている。<sup>(56)</sup>「被」は次の他動詞と用いられる。
    - a) 事物に直接の影響をあたえるもの、「吃」，「作」のたぐい。
    - b) 「認識の方法」をしめすもの、「看」，「知道」。
    - c) 「与えたり，奪ったりする」意味のもの、「送」，「夺」。
    - d) 「人事への干預」をしめす（析求動詞）、「請」，「允許」など。
    - e) 「認定」の意味をもつもの、「認」，「当」これはつねに繫詞とともに用いられる。
    - f) 「変化」を意味するもの、「分」。
    - g) 感覚（と感覚の表現）をあらわすもの、たとえば、「笑」，「罵」。
- 「被」とともに用いられない動詞でただひとつのグループは「所有」関係

(56) 黎錦熙，新著国語文法，122-145頁。

をあらわす動詞（「有」とその反対の意味の「没有」,「无」）と半補助詞性をもつ動詞である。

したがって、動詞の及物性はまた「被」使用の条件となる。及物性は「被」を用いるための基礎とみなしうるから、不及物性動詞とともに機能は果しえない。

以上により結論できることは、中国語には及物性の範疇があり、動詞が「被」とともに用いられる文は原則として動詞が「被」なしで用いられる文と相互に書きかえられることである。

性質上「被+動詞」と「0+動詞」という二形式のきびしい一貫した対立問題は明らかにならないままである。「動詞+0」形式が「動詞+被」形式の意味をあらわせるかを研究しなければならない。いわゆる「被」使用の任意性の問題を明らかにする必要がある。なぜならインド・ヨーロッパ語比較言語学の観点からすると一定の範疇の任意性は、その範疇自体の存在に疑惑を<sup>(57)</sup>いたかせるからである。たとえばア・マスpero教授が中国語のあらゆる範疇を任意的なもの<sup>(58)</sup>とみなし、中国語にはあらゆる語法範疇が欠けていると結論しているのは周知のことである。

### 動作の主体を意味する名詞

どんな構造の文でも「被」があるばあい、それは直接動詞の前におかれるか（動作の主体たる名詞がかけているとき）あるいは動作の主体たる名詞の前におかれる。このばあいの「被」は一連の研究では主体の附加成分とい<sup>(58)</sup>われている。

「被」の後にくる名詞は動作の本源、主体である。しかし、いくらかその特徴についていえば、これらは活動体名詞も非活動体名詞も含み一様でなく、行為者や行為する物をしめす名詞もあれば、具体的な名詞も抽象的名詞

(57) 本書（原文）54-61頁。

(58) 華俄辞典, イ・エム・アシャーニン編, モスクワ, 1952, 566頁。



もあって、同種類のグループとはいえない。

「被」の後に非活動体名詞がおかれたとき、それは主体であるだけでなく動作の本源である。

某某人就是在上海被汽車碾死的（巴金，家，323）

被酒燒着的（巴金，家，330）

两条腿被石头碰得…（魏魏，9）

行為者はそれが代名詞や固有名詞のばあい、とくにはっきりと表わされる。

被他压彎了（魯迅，0026）

被白茹学得（林海，30）

行為者は普通名詞であらわすことができる。

…被两个騙子騙了（叶聖陶，童話選，0040）

被人制服的（巴金，家，53）

動作の主体が抽象名詞であらわされる。

被幸福遺棄了（巴金，家，53）

これらのことは次のことを語っている。「被」が動作の主体をあらわす名詞とむすびつくか、あるいは動作の本源の附加成分であるばあい、名詞の語義は意義をもたない。「被」は抽象名詞または非活動体名詞の前におかれるが、非活動体は事実上行為をせず、実際に行為するものの前におかれる。

周知のように動作の主体が活動体の「被」をともなる文とともに、これに多くの点で似ていて非常に一般的に用いられる文型がある。それは補語が前に出る文である。たとえば、

过去的种种事情…他都看見了（巴金，家，250）

她写给她姑母的信是被大衆都看了（丁玲選集，12）

この文はふたつとも異なる形態的分化があるが、文のはじめには後にくる動詞の動作の客体たる名詞があり、その後には動作の主体となる名詞がつづき、最後に二つの文とも同じ形態をした動詞があることで似ている。いず

れも動作の主体は現実に動作を行なう。しかし、第二例では動作の主体の前に「被」があるのに、第一例にはない。ちがいはまだある。第一例では第二例と異なり、動作の主体がつねに動作の実際の行為者たる活動体名詞にかぎられている。したがって、実際に動作の主体となる名詞は中国語のシンタックスの立場からすれば、動作の客体となる名詞と動詞の間におかれるといわねばならない。この位置にある動作の主体となる名詞は、それが動作の主動者であることをしめすどんな附加成分(формант, formant)も必要としない。

「被」をともなう文では、活動体名詞にも主体性をしめす特殊な附加成分は何もいない。その主体性はあきらかである。それゆえここに「被」のあることは主体の位置によっておきたものでなく(主体の名詞がここに位置できさえしたら)、また「被」の後にある名詞が動作の主体であることをしめす必要によるのでもない。これは名詞自体の意味からすでに明らかである。

「被」をともなう文で、これとは違ったものがある。それは「被」の後にある非活動体の名詞が、実際の主体つまり動作の主動者でないものである。この文に「被」がないと、意味上の不規定性をつくりだすことがしばしばある。だから、このばあい「被」はどうしても必要である。なぜなら、こういう名詞は意味上実際の動作の主動者ではないからである。「被」は本源の附加成分、つまり動作の主体といえるかもしれない。しかし、このばあいこういう主体が動作の語法的主体であって、「被」は動作の語法的主体の附加成分であるといわねばならない。「被」は動作の語法的主体の附加成分として、それが名詞の前におかれたとき活動体とみなしうる(主体は動作の実際の主動者であるだけでなく語法的主動者でもあるから)。

このほか「被」はその後の名詞が省略されているとき、動作の語法的主体の附加成分とみなしうる。たとえば、

但朝鮮戦争是被扩大化了, 太平洋的安全是被破坏了, 究竟是誰扩大了朝鮮战争的? 是誰破坏了太平洋上的安全的? (文件集, 207)

「被」のある最初の受動態文二つには動作の主体になる名詞がない。三番

目と四番目の文は、はじめの受動態文三つから再編成された能動態である。ここで主語になっているのは、動作の主体なる疑問代名詞「誰」である。「被」をとともなうはじめのふたつの文を能動態になおすことは、「被」をとともなう文に「被」が動作の語法的主体の附加成分として入ることによって可能と思われる。

たとえば「被」は次のばあいには語法的に働いている主体の附加成分として入れる。

- 1) 名詞がつねに実際の動作の主体たる活動体であるとき。
- 2) 名詞が実際の動作の主体でない非活動体であるとき。
- 3) 一般に名詞が欠けているとき。

これはみなきわめて異種なばあいである。したがって「被」の使用を条件づけるものは、名詞の語義であって、名詞を欠くことができるということではない。

受動態に「被」があることは、動作の主体たる名詞の文中における語法的はたらきにより説明できるか。

受動態における動作の主体たる名詞は補語であり、「被」のおかげでなおかつ語法的に働らく主体（動作の語法的主動者）となる。もし動作の客体たる補語を前へもち出した能動文にうつると、そこでは主体たる名詞が主語でありながら、また語法的に動作の主動者であり、何らかの補助詞のたすけをかりない。したがって、主体となる名詞が受動態で補語となる時、主体となる名詞の代りに「被」をかりて語法的動作の主動者をつよめる必要がある。しかし、何によって主体が補語のはたらきをすることになるのか。また主体たる名詞が一般的にいてないとき、動作の語法的主体の附加成分の必要なことは、何によって説明されるのか。それは「被」が名詞のあるなしにかかわらず用いられるからであり、「被」のはたらきは語法的にも意味論的にも名詞との結合によって条件づけられないといえるからである。これは次のことを意味する。動作の語法的本源の附加成分として、それが役割を果す

ことの必要性は、「被」が名詞の前にあるとも名詞そのものによって条件づけられるのではなく、他の要因によるということである。

我只願意一切都包在煙霧里（巴金選集，207）

この文で「煙霧」という名詞は事実上動作の主体であるが、前置詞・後置詞構造にふくまれており、したがって語法的には動作の完成の場所を意味している。動詞の前にある「被」はどうしても、この名詞とはむすびつかない。上例は明確に次のことをしめしている。すなわち「被」と動作の主体となる名詞との相互関係にのみかぎって考察すれば、上の疑問にたいするこたえがえられない。「被」をともなう文では主体の名詞と動詞のほかに、動作の客体たる名詞も参加している。